

令和5年度 第3回豊田市生涯学習審議会 会議録

- 日時 令和5年10月19日(木) 午後1時30分～午後3時30分
- 場所 市役所南庁舎5階 南52会議室
- 出席者 [豊田市生涯学習審議会委員](敬称略 50音順)
- 江里口あけみ (柘塚西町ささえ愛隊 副代表)
- 大岩由治 (とよたシニアアカデミー 事務局長)
- 大山昌史 (市区長会 理事)
- 鬼木利瑛 (株式会社 eight 代表取締役)
- 小宮山利恵子 (株式会社リクルートスタディサプリ教育
AI研究所 所長)【副会長】
- 坂元玲介 (とよた多世代参加支援プロジェクト 会長)
- 戸田友介 (株式会社 M-easy 代表取締役)
- 古川由香 (市民公募)
- 古澤三秀 (市民公募)
- 牧野篤 (東京大学大学院教育学研究科 教授)【会長】
- 三ツ石靖子 (豊田市市文化振興財団 交流館課 主任指導主事)
- 欠席者 近藤 悟 (地域学校共働本部推進アドバイザー)
- 事務局 加藤達志 (生涯活躍部 副部長)
- 小澤真里 (市民活躍支援課 課長)
- 和出広樹 (市民活躍支援課 副課長)
- 堀田真悟 (市民活躍支援課 担当長)
- 竹内祐衣 (市民活躍支援課 主査)

次第

1 開会・あいさつ

2 議事

「人生100年時代における学びのあり方と方策」

- ・中間とりまとめ(案)について【資料1】
- ・学びの方策について「学び合いを通じたひとづくり」【資料2】

3 閉会

1 あいさつ

A 委員:

もう四季桜は咲いていますか。やはり異常気象で、上野公園で狂い咲きが始まっている。暑さと水不足で花のつぼみを抑えるホルモンが出なくなっているらしく、咲き始めてしまった。いろいろな意味で変わってきてしまったと、そんな時代にきていると思う。

本日、中間とりまとめ案をお出しして、今後のあり方について大きな方向性を出そうかという議論になると思うので、いろいろ皆さんの方からご意見をいただきたい。そして、私もお世話になった地域共生社会推進全国サミットでは、いわゆる共生社会というあり方は福祉がベースだったが、福祉のものというよりは一つの新しい社会のあり方として、すべての人が関わってつくり上げていくものであるという方向性が確認できたのではないかと思う。大事になってくるのが学ぶということ、いわゆる勉強から学びに切り替えていって、一生涯学び続けて、新しい社会をつくり続けていくということ。そういうことを私たち自身が受けとめて日常生活の中に活かしていかなければならない。その中で新しい生活様式をつくりながら様々な課題に対応していく。ぜひとも今日はたくさんご議論をお願いしたい。

2 議事

<意見交換> ※要約

- 【資料1】「人生100年時代における学びのあり方と方策」中間とりまとめ(案)

事務局

* 資料に基づいて説明

A 委員

中間とりまとめ案について事務局から修正点をご説明いただいたが、ご意見あればお願いしたい。とくに OECD のラーニングコンパスについては、コンパスということが大事。地図が描かれていてそのとおり歩きなさいということではなく、地図がない時代にコンパスを使って学び続けながら人生を歩いていく、道をつくっていくということが反映されているので、地図というより羅針盤。そ

の部分も含めて大事だということかと思う。

B 委員

15ページに「Do よりも Be（何をするかよりどうありたいか）など従来の価値観から転換が求められる」とあるが、一方で最近「Doer」という言葉が、何かをし続ける、やり続ける人というイメージで使われている。「Do よりも Be」について何を言いたいかはわかるが、こういう記載だと「Do」に価値がないように見えるかもしれない、何をすることも重要だと思う。Plan Do See の Planをとばして Do から始めようという人もいるため、表現を少し変えた方がよいかもしれない。

A 委員

「Do よりも Be」について「よりも」という表現が気になるということかと思う。今までは、すること、つくること、やることに価値があるといわれてきたが、福祉的にできない人もたくさんいるので、いることだけで良くないのか、またはそういう状態にあることだけで良いのではないのか、むしろいることに価値があるのではないのか、価値とまで言わなくても、お互いに認め合う関係をつくる、受けとめ合うことが大事なのではないかという議論があって、「Be」が大事だと言われる。ウェルビーイングのビーイングも同じ。よりよく生きないといけないのか、良くあるという状態ではいけないのかという議論がある。

C 委員

AAR の考え方でも行動が重視されているため、「Do」にも大変価値があると思う。ただここで言いたかったのは、What よりも Why ということかと思った。あと、すべてを生かせるということが良いのではないかと思う。弱み、強み、状況、障がい、生まれ育った環境、国籍など、ネガティブに捉えがちなこともすべてが人生の糧になっているということが、これからの時代は特に重要だと思っているため、そういう意味合いで捉えていけるような文章になると良いと思った。

D 委員

福祉の観点でいくと、アセスメント評価をとるときに、なぜやりたいかという意味の部分を追求しがちだが、社会的弱者といわれる方に意味を問いかけてもなかなか出てこない。とりあえずやってみようと思いを背中を押すことを福祉としてしっかりやっけていこうとしている。意味を考えるよりもまずやっけてから意味を考えていこう。以前は計画がないとやっけてはいけないという考え方だったが、まずはやっけてみようという考え方に変わってきている。

また、15ページの「そのためにも、地域や大人が総がかりで子どもたちと関わっていく仕組みづくりが重要であり」という表現だけを見ると、一般の高齢者は子どもを支えていくためにいるように感じた。みんなで子どもたちの学びを支えていくという表現に変えると違ってくると思う。学び合うという表現、子どもから高齢者も学び、高齢者も子どもから学ぶ、学び合うという表現をうまく使えると良いなと思った。

E 委員

15ページの「従来の価値観から転換が求められる」という部分について、今はどちらかという価値観が一つではないという感じかと思う。シニアの方と話していると様々な考え方があると感ずるため、従来の価値観が間違っているというのは少し違ってくると思う。従来の価値観には含まれないものも新たな価値観として認められるような表現の方がよいのかなど。シニアの方はいろいろなことを学ぶと心が豊かになる、人生が広がる、自分に残された時間を大切にしたい、そうしたときに価値観を改めるということがあると思うと、間違っていると言われると少し違ってくるのではないかなと思う。

F 委員

学びとは向き合い続けることだと思ふ。それぞれの自分の人生についても、地域についても、とにかく向き合い続ける中で自分も変わっていくといけな。それが幸せにつながっていくということだと思ふ。A委員が楽しくという話をよくされる。大きな課題はあるが、それに楽しく向き合い続けていくことが学びでもあり、自分の人生を豊かにするということだと思っている。

15ページの「そのためにも、地域や大人が総がかりで子どもたちと関わって

いく仕組みづくりが重要であり」の部分について。私たちの住んでいる田舎は6割が65歳以上の高齢者。先日、自治区のこれからの地域を考える会合で、高齢者や子どもなど世代ごとの議論をしていたので、そうではなくて、地域で全部取り組んでいく方向性、みんなでそこに向き合っていくための何かをやりましょうという話をした。おそらくこの書き方だと、地域の人はお年寄りが疎外されているように感じるだろうと思う。ただ、子どものためにという動きやすいのは事実。今年は、子どもが太鼓を叩いたから祭りができた。でもそれだけだとやはり難しい。みんなで集まるようにしようという話も出たが、結局それぞれの価値観で集まろうということになり、難しいなと思いながら議論をした。難しいが向き合っていないといけないから、継続的に議論をしていきたいと思いますとして終わった。

G 委員

15ページに「多様な生き方が尊重される時代において」とあるが、従来の価値観ではなく、複眼的な、異なる視点を持つようになってきた。当然価値観は個人で異なり、様々な価値観を持つということが大事かなと思った。

A 委員

難しいなと思うのは、「価値観の転換」の部分は、従来のいわゆる工業社会の、規模を拡大することが良いことであるとか、みんなを同じように扱うことが良いことであるとか、そういう価値観ではないと言いたかったのだろうと思う。しかしここだけを取り出すと、みんなそれぞれ自分の価値があるから価値が多様化しているという捉え方をした方が良いという議論になると思う。そのあたりはもう少し丁寧に文章を書く必要があると思う。

あと、B 委員がおっしゃった「Doer」、いわゆるやり続ける人については、「Doer」になれるのは強い個人ではないか、弱い人はどうするのかといった議論がある。ウェルビーイングについても「ビーイング」状態にあるということをもまずは認めましょうということも言われたりする。Be であることが Do につながる、Being であることで、Doer になるという論理が求められているのかと思う。

また、資料1の15ページの「人を起点にした施策「学び合いを通じたひとつづ

くり」を進めるためには」と、本日後半に議論いただく資料2「学びの方策について」については、第9次豊田市総合計画に盛り込む可能性も視野に入れて議論したい。それから、「そのためにも、地域や大人が総がかりで子どもたちと関わっていく仕組みづくり」の書きぶりについて、みなさんの議論を伺っていると、子どもを含めて全員が主役になる、みんながそれぞれ役割を持っているので、みんなが社会でそれぞれ価値をもって生きられるようにしていく、教え合い、学び合い、助け合う中で、みんなが幸せになれるような社会をつくりましょうという表現になるという感じがするかどうか。

H 委員

こうでなくてはいけないということではなくて、その人それぞれの価値観があるので、お互いを認め合う。それから大人が子どもをではなくて、大人も子どもも共に寄り添い合いながらやっていけないかなと思う。

A 委員

そういうことですよね。みんなが仲良く一緒にやっていけるようにする。誰も否定されないような関係の中で生きていけるようにするということかと思う。

もう一つ、15ページの「年齢やライフステージに応じた」は今までやってきたこと。むしろ年齢やライフステージで分けない社会になってきたという言い方もされたりするので、そういうことも含めていろいろな価値をもった人が受けとめ合いながら生きられる社会にしていこうということ。

I 委員

話を聞いていて、「Do よりも Be」について、「よりも」と書いてあると少し違うと思う。何をするかよりも、なんでも良いから始めてみるというのが交流館的な考え方かなと思う。最初から目的がない方もいらっしゃって、とりあえず興味があるから始めたことがライフワークにつながることもあるので、「よりも」ではないという意見には共感する。

先日交流館職員の試験があつて、30人応募があつた。面接の中で「人生100年って何を想像しますか」と聞いたところ、見事に30人が「高齢者の方が元気に100歳まで生きられるような仕組み」とか、「いまの70代以上の方が最

後まで幸せに死ねるような社会のこと」と答えた。やはりそういう印象なのだと
思った。昨年の審議会で A 委員が、生まれた赤ん坊が 100 年どう生きるかが
大事とおっしゃったのが今でも私の中で落ちており、そのために今の大人がど
う関わっていくかが大事だと思っている。ただ、今の大人が子どものために力を
注ぐのがすべてなのかといわれるとそれは違って、もちろん大人の生きがい、生
きる喜びみたいなものがないといけない。そのため、「地域や大人が総がかりで
子どもたちと関わっていく仕組みづくりが重要であり」の部分は言い方を少し
変えてもよいかと思った。

あと、人生 100 年といわれると市民の方はまだまだ高齢者をイメージする
ので、そうではなくて、子どもも大事、現役世代も学びから得るものがある、学
びが大事という、もともとの生涯学習の意味をあらためて浸透させたいと思う。

A 委員

「Do よりも Be」と言いたくなる気持ちもわかる。たとえば過去の社会では、
することに意味がある、何かをつくる、価値をつくることが大事なこととなっ
ていたが、今は強い個人が何かをつくっていくということではなくて、いるだけで
良いのではないかと。その意味では、強い個人が良い思いをするような社会では
なくて、みんながそこにある状態でお互いに受けとめ合いながら社会に位置付
け合って、居場所があるような社会をつくっていきましょうという議論になっ
てきている。みなさんのお話を伺っていると、Do そのものが、強い個人が何か
をつくり出すということではなくて、みんなが受けとめ合う関係の中でそれぞ
れがそれぞれのやりたいことをやれるようになっていく、その中で社会が多種
多様なものとして、みんなが受けとめ合うというイメージになっているのだろ
うという印象を持った。そのあたりをうまく表現できると良いと思った。

J 委員

あくまでも人生の主人公はその方自身なので、こうでないといけない、誰かに
点数をつけてもらって高得点を取らないといけないということではないと思う。
その方自身が、暮らしの中で今日良いことがあったと思える時間があることが
大事かなと思った。

次世代をみんなで育てるというところについて、上の世代の方が子どもたち

を育てるといふことかと思うが、実は子どもたち同士で学び合ったりしている。「サンドイッチマン&芦田愛菜の博士ちゃん」というTV番組があるが、誰から学ぼうとどこで学ぼうと自由だと思う。世代、高齢者、子どもという区別ではなく、その人個人が自信をもって取り組んでいることを教え合うと捉えたらどうか。もちろんその中でも、自分が納得しているなら、今は満足だから休憩することもありなのかなと思いつながらみなさんの意見を聞いていた。

F 委員

社会の方はもう変わってきていると思ったときに、審議会でのあり方を審議していると思うが、こうして話していることを進める行政や学校のやり方に向けてのメッセージを出していても良いのではないか。そういう意味では、「多様だよ」で終わるのではなく、あえて「変わるんだ」という尖った言い方をしていく、お年寄りもすごく大事だがとにかく次世代を育てるんだというメッセージなど、尖ってみても良いかもしれないと思った。

A 委員

資料1の4ページ、OECD（経済協力開発機構）のラーニングコンパスで示されていることも踏まえて、みなさんの議論を聞いていた。

今までは地図が示されてこういうことをやっていきなさい、このとおりに歩きなさいと言われていたものが、地図がない社会になってきたのでコンパスを持ちましょうと言われるようになった。一人一人がコンパスを持って自分で歩いていけばそれで良いということもあると思うが、これも下手すると、やはり自分のコンパスを持ってうまくいく人といかない人がいて、逆に強い個人が大事なのだという議論になることが多い。そうではなくて、コンパスをそれぞれが持てるようにしていくが、教え合い学び合う関係をつくって行って、道に迷ったら相談できる関係や、困っているような仕草があれば誰かが声をかけてくれるなど、そういうことの中かで自分が生きていけるようになっていく100年社会を考えましょうということにもつながっていくと思うので、うまく表現できれば良いと思う。

それからF委員の話だが、既存の様々な制度が残っていて、縦割りの中で動いている。それが過去の社会では効率的だったが、今の社会ではむしろ非効率に

なっている。そういったことも匂わせながら、既存の制度も変革が求められているといったことが少し言えるような調整ができればと思う。気持ちをお聞かせいただいて、あとは事務局と文言を検討させていただくという形で。

D 委員

F 委員といっしょで、尖っていただければと思う。

F 委員

A 委員も以前に破壊的とか壊していくという単語を使っていたかと思う。

A 委員

第9次豊田市総合計画の最初の会議で、太田市長から総合計画を構造的に変えなければいけない時期に来ているという発言があった。国が計画を作らなくなっているのになぜ自治体を作るのか。あるいは、目標値を設定して達成しようという計画はいらぬのではないか。市そのものが羅針盤を持ち始めて、自分たちで行く道を決めていくということができないかという観点もあると思う。

F 委員

羅針盤についてもう少しお話を伺いたい。コンパスはそのとおりだなと思うが、どういう意味で使っているか。

A 委員

杉並区教育振興基本計画の策定に関わったが、従来の計画づくりとは異なるづくり方をした。杉並区の教育振興基本計画「教育ビジョン2022」は、命、人権、尊厳ほか、障がいの有無、性的マイノリティなども全部含めて、お互いを尊重し合うことは、どこまでいっても譲れない一方で、社会の転換期では明確な将来像を描くことが難しいことから、これまでのような目指す人間像を定めるのではなく、「私たちが大切にしたい教育」「一人ひとりが教育の当事者として心がける視点」「教育行政の取組の方向性」を記載している。日本で一番短いと思うが17ページしかない。コンパスとは「教育ビジョン2022」のようなものだと思う。教育行政の具体的な取組については、この「教育ビジョン2022」

に基づいて毎年、行政計画を策定する。

「教育ビジョン2022」では、誰もが自分らしく生きることを大切にして、みんなの幸せを創るためには、一人一人が当事者として認め合いながら、共に学び合い、教え合い、かかわり合って、新たな価値を創り出すことが大切という観点から、「私たちが大切にしたい教育」として「みんなのしあわせを創る杉並の教育」を掲げている。各学校ではそれに基づいて、子どもたちに幸せとは何かとか、幸せをつくる教育・学びとは何かを考えさせる集会や、そこに学校運営協議会や住民が関わった勉強会を、計画策定から継続して開いている。こういう継続的な学びが重要だと思う。

●【資料2】学びの方策について「学び合いを通じたひとづくり」

F 委員

産業部のすみわけもあり、仕方ないかなと思うが、ビジネス要素が薄いかなと思う。アントレプレナーシップ教育も遊びではない。大人の学びについても、年を重ねてもずっと働く社会になっていくのだろうという中で、そのあたりが表現されていないように見える。

事務局

アントレプレナーシップについては、産業的な視点も大事であるため、産業部門と連携しており、より専門的な起業については産業部門で立案を検討している。社会教育の立場としては、入口の選択肢の拡充のところに着手している。

F 委員

大人の学びについても同じで、起業だけでなく副業など、働くことも多様になっており、学びながら働いて暮らすということだと思っている。具体的な施策になっていくとなかなか落ちにくい印象を持った。今回は入口の社会教育の部分でということならそれでもよいが、もうちょっと踏み込むのかなと思っていた。

B 委員

F委員の意見が興味深い。具体的にどうするか、尖った感じで。

F 委員

B 委員も色々なことをやっているが、まずはメッセージとして、学ぶこと、働くこと、生きることが重なっていくということがまず大きく表現されつつ、そういうことをやりたいと思ったときにアドバイス、仲間づくり、金銭的補助などのサポートができるようなあり方が示されるといいかなと思った。

B 委員

まず視野を広げることが大事なのもかもしれないと思う。これまでのように一つの会社ですっと働くことが厳しくなってきたとする中で、こういう働き方があるんだ、働かって辛いものではなく楽しいんだということなど、新たな視点が得られるような機会を与えられると視野が広がる。たとえばロールモデルがないということではなく、あることを知らないかもしれないので、それを見ていただくなどが有効かもしれない。

C 委員

8ページの「年齢やライフステージに応じた」の部分、小学生、中学生など分けて記載されている部分が経験上気になっている。大学生向けにキャリア系のイベントをしたときに、高校生にも参加してもらったところ、高校生と大学生の垣根なく実施ができた。また、名古屋の中学校でキャリアの話をしたときに、働くことに対するイメージを中学生に聞いたところ、「社畜」「パワハラ」「つらい」などの発言が出てきて先生も驚いていた。これは大人の責任であり、家事と育児の両立の辛さなどを、SNS などを通して子どもは全部見ているから、そのイメージがあるのだと思う。そのため、生き生きしている大人との出会いがあると「好きなことをやっている大人っているんだ」と中学生が発見する。これは中学生と大人が混ざり合うから学び合いになるのだと思う。

それから先日、豊田高専で、副業や起業をしている山村部の大人がプレゼンしたときに、生徒が先ほどの中学生と同じように、「大人になっても好きなことができるんですね」と言った。就職するイメージは非常に悪いのだなと思った。その意味で混ざり合わせても良いのかなと思った。例えば、小学生のために大人を、中学生のために大人を出会わせるという考え方ではなく、大人のためにも中学

生と出会う、大学生のためにも高校生と出会うなど。

年齢やライフステージに応じた場面も必要だということもあるが、社会教育においては、相互による学び合いの視点が大事だと思った。子ども大人も学び合うことで、働くことに希望を持ってもらえて次世代の育成にもつながると思う。楽しんでふざけている大人もたくさんいて、高齢の方でも新しいことに常にチャレンジしている大人もいるため、そういうところも子どもに見せていけると良いと思う。

江戸時代のイノベーターの人たちを紹介している本をいただいて読んだ。江戸時代のイノベーターは、年を重ねても新しいことを学び始めており、年下の方からも学んでいた。J委員の話にもあったが、たとえば大人が高校生から iPad で絵を描くことを学ぶなど、新しい学びを得る時に子どもから学ぶようなものがあると良いと思った。

A 委員

「働く」ということも含めて学びのあり方を捉えなおし、大人と子どもが学び合っていくことができないか。島根県益田市の「益田版カタリ場」は、小学生と高校生、中学生と地域の大人、高校生と市内の大人という形で対話集会を開いている

また、益田市では「益田版カタリ場」のほかに「新・職場体験」を実施している。従来の職場体験のような職業キャリアではなく、ライフキャリアといって、子どもたちが自分の人生を考えるため地元の事業所にインターンシップに出かける。企業が学校に来てプレゼンをし、子どもたちが行きたい企業を選んで希望を提出。採用面接のように面接もあり、その後は社員がメンターとして、インターンシップ中に自分の人生を語り続けるという取組。子どもたちは職業も体験するが、大人の面白さも体験して帰ってくる。

このほかにも益田市では、学校区ごとに年齢を分けずに大人と子どもが集まれるような集会をやるなど、ライフキャリアに関する取組が重層的につくられている。益田市の子どもたちは、このような環境で小・中・高と地元で育ち、世の中で役割を果たすため社会へ出ていき、地元にもいつでも戻ることができるような仕組みになっている。

益田市のこうした取組も踏まえて、産業を基盤とした大人がいる豊田市の特

性を生かして豊田市らしい取組をつくるということもあるのではないか。

10ページの学びの情報プラットフォームについて。前回の審議会で、豊田市の生涯学習に関するEモニターアンケートの結果が参考に示されたが、その中で学ぶ意欲のない方が2割いた。最近、私の研究室の学生が、卒業論文で、大人たちがなぜこんなに学ばないのかを研究している。世界的に見ても日本は、生涯学習をやっていると答える割合がすごく低い。国としては、労働力の問題もあって、学び直しを一生懸命奨励しているが国民のほとんどが学んでいない、あるいは意欲がない状況。このことについてアンケートを取ろうとしたが、学んでいない人はあまり答えてくれないので、学んでいる人、20代後半の女性を中心にインタビューをした。回答として多かったのは、30代になると結婚・出産・育児・介護があることや、30代で転職を考えると転職してすぐに学びの時間を要求できないことなどから、20代後半が学び直しのラストチャンスだと思っているということ。その背後には、20代後半から結婚、出産、育児の負担がのしかかって、時間がとれないと考えられていることや、育児が終わると今度は介護がやってくると思われることがある。このように、いくら学べといわれても、女性に育児・介護の負担がかかっていると学べない。

また、回答者の多くが高学歴で大企業に勤めており、大企業では手上げ方式でどんどん職場を変われるような流動的な環境で学びが提供される仕組みがある。高学歴で、小・中・高と学ぶことで良い思いをしてきた人は、学びたいと思うし、学び続けられるのではないか。反対に、小・中・高で学ぶことで嫌な思いをした人が、学歴社会で高い学歴を得られず中小企業に就職しているとすると、学びの気持ちが萎えていて、大人になってから、条件を整えたから学べと言われても学ばないのではないか。そうすると、学歴社会が生涯学習を阻害しているという面が見えてくる。そうであれば、C委員がおっしゃったように、小・中・高の区別なく大人と触れあう環境をつくっていく必要があるのではないか。

B 委員

小さな成功体験の積み重ねがあると、学び続けて良いことがあったと思うことが多いのかもしれない。中小企業に勤めている方で学びに抵抗や嫌悪感がある人たちがいる。彼らが学んでいた時代は、評価軸が偏差値一つしかなかった。しかし、今の時代は評価軸がたくさんあるので、実はその人に対して評価される

ポイントがたくさんあるかもしれない。評価軸が一つしかない時代に学校教育の中で学びに抵抗や嫌悪感があった方のマインドセットをどう変えるかが重要かなと思った。今は評価軸が変わっているから、今のあなたはここがすごく評価されるということを書いてもらう機会があると、学びに対する意識が変わってくるのではないかと思った。

A 委員

C 委員がおっしゃったように、子どもが「すごい」と言ってくれたことが、本人にとってはたいしたことがないと思っている部分だったりする。過去の学歴社会での価値観では、たいしたことがない、うまくいっていないと思っている部分が、逆に子どもからすれば魅力的だったりするということを発見することが、大人にとって必要だと思う。そうすると、小・中・高などの区別をなくした形で、大人と子どもが触れ合うことによって、子どもも大人の生きざまを学ぶことができるし、大人も子どもにとって自分の生きざまが、こんなことが役に立つとか、興味を持ってもらえるのだと思えることが大事だと思う。

J 委員

世代関係なく学ぶことについて、小学生にとって一番身近な大人は家庭だと思っている。家庭にいる大人が社会の一員。学校などで学んだことを持ち帰る場所が家庭かなと思う。外で学んだことを持ち帰って、近い距離で認めてくれる人がいると蓄積されていって、もっと学んでみようという意欲や、満足したといった達成感などにつながると思う。様々な大人の中には両親も含まれているので、家庭で身近な大人が仕事で疲れている姿などを見ているが、それぞれの個人が学び合いを見つめ直すきっかけがあると良いと思う。

A 委員

身近な大人としての家庭も含めて相互に認め合うあり方も必要ということ。

E 委員

前の職場では小学生を集めて学びの場をつくっていた。中には、親に行っておいでと言われて来た子もいる。本当は自らの好奇心で大人顔負けの知識を身に

着けた「博士ちゃん」のような子を育成する場があると良いと思うがなかなか難しい。シニアにおいても、シニアアカデミーでやっと自分の居場所が見つかったという人も中にはいる。子どもも様々な機会を提供すると、中にはそれが自分の居場所、自分のやりたいことだと見つける子もいると思う。そういう考えに立つと、施策を考える時に、全員がそれで満足するのはなかなか難しいと思うが、やはり居場所になるような事業企画をするのは大事。NHK 連続テレビ小説「らんまん」の万太郎さんの話もすごく共感したが、一番は友達づくり。友達のことをよく理解するには顔を覚えて名前を覚えるとそこからいろいろなことがわかる。星も花も同じで名前を覚えて顔を覚えるとそこから興味が膨らむよと話していた。それと同じで、ここが自分の居場所だと思えるような機会を提供できると良いと思う。

資料2の3ページに、「高齢者も含めたすべての人々が、社会の能動的な主役の社会」と書いてあるが、「能動的」という言葉が良いなと思う。似た言葉に「主体的」があるが、これは自分の意志や判断に基づいて行動すること。これに対して「能動的」は、自分から他へ働きかける様子なので、周囲を巻き込んだり、影響を与えたりすることにつながり、まさに活躍につながると思うと、この「能動的」というのがキーワードだと思う。だから、この「能動的」をもっとわかりやすく表現できると良いと思った。

A 委員

シニアアカデミーの事業から能動的な主役になっていくという話につなげていただいた。

F 委員

E 委員のお話を聞いて、機会があってこそみんながその場で能動的になると思っている。前回もお話したが、山村地域だと子どもたちが行きたいと思った場所へ自力で到達できない。タブレットをはじめオンラインを活用することもあるが、そこに行って直接会って話をするというリアルな関係が学びに大事。子どもたちがバスに乗って行きたい場所へ行けるというのは、意外にお金もそんなにかけずに効果生まれるのではないかと思う。

A 委員

出合いの仕組みをどうするかということ。

F 委員

4年生の息子が陸上を習っていて尾張旭まで週2回送迎している。学区だと息子が一番速いが、そこへ行くとみんな速くてそれがすごく良い。先生から色々教えてもらって、体の動かし方やコツを教えてもらうことが楽しいと言っている。子どももお年寄りも、自分で動けない人たちが到達しないとその場でそういう機会を得られないため、バスを無料にするなど移動することに対して動線の支援があると良いと思う。

A 委員

出会う仕掛けづくりも大事なのではないかということ。

F 委員

学校にバス予算をつけてもらうのもよいと思う。昔はたくさんあったらしいが、今は全然ないらしい。学校に予算がなくて体験のために外に出かけたいけどできないということで、地域のおじさんがわくわく事業で申請して子どもたちを学校から体験の場へ運ぶということをやっている。

G 委員

学びの情報プラットフォームの構築について、情報が一元化されていないのは現状としてある。事例として紹介したいのが、豊明市のとよあけ市民大学「ひまわり」。平成25年からスタートしているが、市民がすべてやっている。講師も含めて市民が企画して実施している。参加者がつくかどうかは自分の腕、中身次第なので起業と同じ。体験、芸術、音楽、教育など様々で、自分の得意なものを自分で計画して運用も自分でやる。地域に限定されている講座が多いとほかの地域でどんな講座をやっているかなかなか見えないが、豊明の場合は市民以外も受講できる。参加者の募集は、自治会の広報にチラシを入れて募集しており、こんなことをやってみたいという人が出てきて広がりがある。豊田市の講座は

あまり連続性がない。豊明市の場合は大学としてたくさん受ければ受けた分だけ単位として取得できる。そこまで必要ないとも思うが、とにかく、行って教える立場になる場をつくるのも広がりがあると思う。

A 委員

豊明市の市民大学をご紹介いただいたが、交流館ではどうか。広報の仕方、講座に参加される方の意見など。

I 委員

交流館は、地域の拠点施設として市内に28館あって、地域がメインになっている。市全体から参加者を集めることはしていない。広報については地域回覧にとどまっている。このプラットフォームはそれも含めて一元化するということが、交流館の場合は、地区限定になってしまうので、それでも情報を一元化する意味があればよいと思うが、市全体での募集は少ないのでは。

交流館では、地域住民から教えたいや学びたいといった声を拾って、各交流館で共催講座をしているが、地域限定のことが多い。地域の拠点施設で学びの館と打っている以上、全市に広げる必要はないかなというのが正直なところ。ただ情報を一元化していくのも悪くないと思う。

E 委員

シニアアカデミーで、授業を申込んだ方に何を見て来たか聞取りしたところ、広報とよたが一番多く、交流館に置いてあるチラシが二番目に多かった。年代によって何に重きを置いて情報を仕入れるかが違う。SNSでも情報発信をしているためスマートフォンにも届いていると思うが、年代が上がれば上がるほど、実際に手に取れるもの、広報とよたなど紙のチラシの方がより参加の動機につながる。そのため、プラットフォームをつくるにあたっては、ファミリー層や子ども向けにはSNSなども有効かと思うが、シニア向けには、ペーパーレスとはいうものの現時点では紙をなくすことはできないのではないかと考えている。

A 委員

情報プラットフォームについて、一元化はよく言われるが、訴求力、ターゲッ

トにしている方に訴える力があるのか。

C 委員

愛知県の「生涯学習情報システム学びネットあいち」も一元化された情報サイトの一つ。一口に一元化といっても目的や訴求方法が難しいと思った。検索方法を考えてみたときに、学びたいことが決まっている人は勝手に探してくれると思うが、そうではない方に訴求できるものがあるとよい。「モヤモヤしている、子育てがひと段落して学びたい、音楽が好き」など、単なる講座のラインナップではなく、今の状況や感情に合わせて検索できると優しいと思う。そうすると、例えば、「ヨガ」というキーワードに関心を持った方が住まいの近くで開催される交流館講座を受講することにつながるのではないか。そのようなプラットフォームであれば、参加できなくても自分の地域でこういうことをやっているを発見することができると思う。

H 委員

世の中の高齢者向けのイベントの多くは、講師の指導のもとで歌や踊りをするなどの受動的なものが多い印象である。私も高齢者向けの活動をしているが、高齢者もじっと座っているのは辛い。私ならば、みんなで体操しようと言ってしまふ。どなたでもやれることはいっぱいあると思うので、やれることをやってもらう良い方法はないかと常に模索している。例えば、高齢者が自分で作った野菜を誰かに届けるなどの行為があると喜びにつながる。高齢者の固定概念がなくなるとよいと思う。

A 委員

年齢で区切って、高齢者はこういうもの、子どもはこういうものではなくて、何歳になっても役に立てることはいっぱいあるし、役に立ちたいと思っている人もいっぱいいる。情報プラットフォームにもそういったことをどう反映できるかきちんと議論をしていく必要がある。

K 委員

藤岡南地区の 75 歳以上の方、700 世帯 117 人を対象に敬老の日に自治区で

敬老会を開催したところ、50人程度が参加してくれた。また、昨日、高齢者クラブのスポーツ大会に伺ったところ、60代が私一人で一番若かった。80年前の平均寿命は50代くらいだったが、今では80代ということで、まさに人生100年時代を感じた。

市長が第9次豊田市総合計画の関係で自治区や地域会議に意見を聞きに回っているが、藤岡地区は、少子高齢化になり、高齢者で車のない方が買い物や通院が不便という地域課題がある。また、自治区、小学校のPTAや子ども会のなり手不足も話題になっている。交流館を学び場として強化していくためにもなり手不足の影響が出る。そのほか、向こう三軒両隣のつながりが少ないということも感じている。地域の区長がコミュニティ会長を兼ねるということで私もその代表としてこの審議会に出席しているが、28地区すべてのことは把握できていない。

平成26年豊田市生涯学習審議会での教育委員会の諮問答申でもあったが、企業と交流館の関わりとか、その辺の進み具合とか、具体的にどのような事例があるかとか、機会があったら伺ってみたい。

A 委員

自治区の実情をお話しいただいた。旧来の地縁型の学校を中心に地域のコミュニティの方が担ってきた組織が少子高齢化、人口減少、定年延長などを背景に壊れてきている状況がある。また、PTAや子ども会は全国的にも同じような状況だが、任意団体であるにもかかわらず加入しなければならない理由をめぐってトラブルや加入した後の役員の負担など色々なことが起こっている。

以前にも紹介したが、子どもたちが町内会の役員になっている例が出てきており、私が知っているだけでも全国で十数名の子たちが担っている。例えば、横浜市の中学生在が立候補して役員になったところは、彼女がやったことによって、新たに中学生在が3人、高校生が1人入ってきて役員をやったりしている。そうやっていろいろなことが起こっている。

町内会やPTAなどの従来型の組織を、ワーカーズコープ、いわゆる労働者協同組合として、自分たちで出資をして組合を作って、新しい組織で運営する動きもある。何が大事かというところ、町内会を起こすことが大事なのではなくて、町内会のみなさんがお互い結びついていてコミュニティが安定していることが大事

なので、案外いろいろな作り方があってもよいのではないかという議論が出てきている。PTA も学校の先生と保護者が良い関係を作って子どもたちを共に育てることが大事なので、旧来の組織にこだわらなくてよいのではないかという議論が当然ある。学びを通した人づくりをどうしていくかが問われるということかと思う。

H 委員

どなたでも自分の居場所があるはずなので、その場所が見つかるとういと思う。私は多世代の交流サロンをやっているが、子どもが手伝ってくれて、おじいちゃんおばあちゃんが子どものために野菜を作ってくる、大人の方がそれを見守ってサポートしてくれる、そういう関係が続くとよいと思っている。しかし、運営する人材がなくなっていくか心配しているため、サポートしてくれる大人の方たちをうまく育てていきたいと思っている。

E 委員

資料2の6ページのめざす姿の「いつでもだれもがやりたいことに挑戦でき、つながりのなかで、学び・活動・体験を通じて豊かさや幸せを実感できている」のところについて。シニアアカデミーでアンケートをとると、自分が実感するだけでなく、共感できることが社会参加につながって、そこから人生が広がったとか、生活リズムが良くなったなどにつながっていくという回答が得られている。自分だけではなくてみんなが共感できるような施策ができるとよいなと強く感じる。

A 委員

共感できる形で、社会で活躍できる、次へつなげていくことができる。そこに多世代がうまく巻き込まれていく関係をつくっていったら、子どもたちが同じように認められながら社会で生き生きと暮らせるような形ができてくる。そういったことがこれから大事になってくる。いわゆる勉強ではなく、自分が生活をする中でいろいろなことを発見して教え合い学び合う関係をつくって共感して、さらにそれをいろいろな形で次につなげていく連鎖が起こるような社会のあり方が大事なのではないかということかと思う。